様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月２０日現在

機関番号：３４３１３
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０７２００１３
研究課題名（和文）　東アジア仏教論理学史研究のための逸文データベースの構築

研究課題名（英文）　Development of Database for the fragments of East Asian Buddhist logic.

研究代表者
師　茂樹（MORO SHIGEKI）
花園大学・文学部・准教授
研究者番号：70351294

研究成果の概要（和文）：本研究においては、東アジアにおいて独自な展開を見せた仏教論理学（因明）を研究するための基盤となるテキストデータベースのプロトタイプを MediaWiki 上で構築し、インターネット上で公開した。データベースの構築に際して、文献データベースとしての研究のみならず、因明のシステムに関する研究も行った。また、東アジアにおける因明受容の背景のひとつとなる所謂「空有の論争」についての研究もこのデータベースを用いて行い、一定の成果を得た。

研究成果の概要（英文）：In this this research project the prototype database for the fragments of *yinming* (the East Asian transmission of Dignāga's logic) has been developed and published on MediaWiki system, studying the system of *yinming*. Moreover, some important insights into the controversy between Emptiness and Beingness, an important context of the East Asian absorption of Buddhist logic, was gained using this database.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
総　計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学／印度哲学・仏教学
キーワード：因明、論理学、人文情報学、テキストデータベース

１．研究開始当初の背景

(1) 因明研究

東アジアの仏教論理学（因明）は、玄奘三蔵によって陳那（Dignāga）の文献を中心とした諸テキストが東アジアにもたらされて以来、玄奘門下のみならず律・三論・天台・浄土などの各学派においても盛んに研究されてきた。しかしながら、因明は伝統的に仏教の補助学的な位置付けをされてきており、また近代日本の仏教学においても、ダルマキールティをはじめとするインドの仏教論理学派の研究が盛んに行なわれる反面、漢字文献として残された因明は未成熟、不完全なものと見られ、一部の例外を除いて積極的に研究されることはなかった。

しかしながら近年、因明は単なる議論や証明のためのツールではなく、論理式の解釈の違いなどにより中国・韓国・日本において長期間にわたり論争が行なわれるなど、思想史

的に重要なテーマであることが明らかになってきている。また因明や、その背景となる東アジアの唯識思想は、清末民初の中国において、西洋近代科学を匹敵するものとして再評価され、当時の日本の仏教学者の協力の下、その後の革命思想などにも影響を与えるほど中国においては研究されたことから、その重要性が再認識されている。海外でも因明を再評価する動きが見られ、因明を含めた東アジアの唯識思想に関する学会・研究会が各国で催されるなど、研究活動が活発化しつつある。

これまで因明が研究されてこなかった背景には、先に述べたような因明に対する低い評価に加え、いくつかの基本文献を除くと、多くの重要な文献が散逸しており、研究への大きな障害となっているという点も無視できない。敦煌文献として伝わっているものもあるが、逸文の多くが日本の上代から中世の文献に見出されたり、また古写本の断片が日本国内で発見されたりするなど、因明文献研究については日本が中心となって行なう意義が大きい。

(2) 因明文献の電子化とその分析

漢字仏典のデータベース化に関しては、すでにSAT（http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/）やCBETA（http://cbeta.org/）が『大正新脩大蔵経』全体や『卍続蔵経』の大部分の電子化を終えている。また『韓国仏教全書』に関しても、東国大学校EBTC（http://ebti.dongguk.ac.kr/）が完成させている。しかしながら、本研究に必要な逸文が収録されているのは日本の上代～中世の文献であり、それらが多数収録されている『日本大蔵経』や『大日本仏教全書』に関しては、特に南都仏教関連の文献については現時点でもほとんど手つかずと言ってよい。

また、従来のデータベースの多くは、叢書をそのままの形で電子化し全文検索サービスを提供することを主な目的とし、逸文の再構成や引用・被引用関係の可視化することは目的としていない。しかしながら近年、単に検索を目的としない文献学的な分析を行なうことを目的としたデータベースの構築方法について模索されるようになった。

逸文の同定や比較分析については、N グラムモデルを用いた確率統計的な分析手法やその結果の視覚化について、研究代表者（師）を含む研究グループにより一定の成果を上げつつある状況であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、東アジアにおいて独自な展開を見せた仏教論理学（因明）を研究するための基盤となるテキストデータベースとそれを閲覧・分析するためのシステムを構築し、因明研究の発展に資することである。

近年、東アジアの唯識思想や因明が世界的に再評価される中、いくつかの基本文献を除くと多くの重要な文献が散逸していることが、研究の障害となっている。したがって本研究では、研究上必要となる文献群をテキストデータベースとして集成し、逸文の再構成や引用・被引用関係の可視化、論理式の比較分析などを容易にできるようなシステムを開発・公開することで、今後の因明研究の基盤となるような環境を構築することを目的とする。

また、データベース化の前提となる研究として、テキストデータベースに関する基礎的な研究（漢字処理、マークアップなど）に加え、因明がどのような形式を持った論理システムなのか、という点についての検討も行う。その一環として、因明が東アジアに導入された唐の時代、および日本古代中世における因明の受容史的研究も行う。

３．研究の方法

テキストデータベースの構築においては、従来電子化されてこなかった『大日本仏教全書』や『日本大蔵経』等で活字化されている鎌倉時代以前の因明文献について、古典籍のデジタルを専門とする中国の業者を用いて電子テキスト化を行った。実際には、活字化されている文献は全体のごく一部で、多数の文献が写本で残されているという状況であるが、今回は時間と予算の都合で活字化されているものに範囲を限定した。

テキストデータの公開においては、当初は専用のシステムの構築を目指したものの、汎用性などの点からMediaWiki上に、人名や文献情報などのメタデータと統合された形で構築した。逸文の半自動的な発見については、研究代表者が開発に参加したNグラムモデルによる文献比較システムや、MediaWikiの相互リンク支援機能などによって行った。

メタデータの構築においては、表形式で入力された各種目録を、自動処理によってMediaWikiに反映させた。

因明の研究においては、主に因明受容において重要な背景となった所謂「空有の論争」と、明治期において西洋論理学が導入された際の因明側の言説分析という二方面から検討した。明治期の因明研究については、研究開始当初に問題意識としてはあったものの、研究対象としては計画していなかった。しかし、因明の形式化の先行事例を検討するなか、西洋論理学との比較が行われていることから、因明の形式化についての研究の一環として行うこととした。また、末木文美士氏が日本近代仏教研究の重要性について「私の研究

はこれまで、日本古代・中世の仏教を主たる領域としていた。ところが、その研究を進める中で明らかになったことは、古代・中世の仏教に対する今日の常識が決して古くからあるものではなく、明治以来の近代的研究によって形成された部分が大きく、かつまた、それが単に学術的な観点からのみでなく、古典の近代的な読み直しによる新しい解釈という面を強く持つということである」(『近代日本の思想・再考Ⅰ　明治思想家論』トランスビュー、2004) と述べているように、本研究の対照としている日本古代・中世の文献の研究史としても近代以降の仏教論理学／因明研究の枠組みを批判的に再検討したい、という目論見があった。

４．研究成果

テキストデータベースおよびメタデータの構築については、当初予定していた文献を予定通り電子化することができた。今回デジタル化した中国・日本の因明関連文献は以下のとおり。

・　基『因明論理門十四道類疏』
・　淨眼『因明入正理門論略抄』
・　淨眼『因明入正理門論後疏』
・　『東大寺六宗未決義』
・　藏俊『唯量抄』
・　覺憲『因明抄』
・　藤原頼長『左府抄』
・　良遍『因明大疏私抄』

また、因明文献だけでは不十分であるため、デジタル化されていない日本古代・中世法相宗の文献から以下のものを選んでデジタル化した。

・　善珠『成唯識論疏巻八肝心記』
・　善珠『彌勒上生下生經義疏』
・　善珠『觀彌勒上生兜率陀天經義疏』
・　善珠『彌勒下生成佛經義疏』
・　善珠『本願薬師經鈔』
・　善珠『梵網經略疏』
・　善珠『表無表章義鏡』
・　常騰『顕唯識疏隠文抄』
・　常騰『成唯識論了義燈抄』
・　常騰『註金光明最勝王經』
・　信叡『成唯識論了義燈抄』
・　藏俊『菩提院抄』
・　藏俊『大乗法相宗名目』
・　藏俊・勝超等『百法問答抄』
・　眞興『般若心經略釋』
・　眞興『薩達磨奔荼利迦素怛攬略頌』
・　眞興『一乗義私記』
・　眞興『梵嚩日羅駄覩私記』
・　眞興『蓮華胎藏界儀軌解釋』
・　貞慶『法相宗初心略要』
・　貞慶『續法相宗初心略要』
・　貞慶『戒律再興願文』
・　貞慶『貞慶南都叡山戒勝劣事』
・　貞慶『唐招提寺釋迦念佛願文』
・　貞慶『最勝問答抄』
・　貞慶『勸誘同法記』
・　貞慶『解脱上人小章集』
・　貞慶・實範・良算『眞理鈔』

なお、著作権等の関連もあり、以上の文献のすべてを公開しているわけではない。

また、公開プラットフォームである MediaWiki で用いるため、返り点表示・非表示処理など、漢文処理用エクステンションをいくつか開発した。

因明の研究においては、明治時代の因明書、論理学書を、特にベン図など概念の図示について網羅的に調査し、村上専精（1851-1929）や大西祝（1864-1900）らの文献が、近代日本における因明と西洋論理学との交渉において重要な画期となるのではないかという知見をえられた。因明の論理学的な性質に関する従来の研究においては、因明が演繹的な論理学なのか帰納的な論理学なのか、あるいはそれ以外の非古典的な論理学なのかについての議論があるが、明治期の議論を検討する限り、因の三相に基づく 3 値論理的な要素を認めることができた。

「空有の論争」に関する研究においては、従来別個の論争であると考えられていた仏性論争や徳一・最澄論争（三一権実論争）などとの関連を明らかにすることができた。日本の古代から中世にかけての法相宗と三論宗の論争の中で、法相宗が支持する玄奘の推論式（唯識比量）が、三論宗側の支持する清弁の論理式の方法と類似していることから、法相・三論の論争における「隠れたテーマ」であった仏性論争が混入した。そしてその延長線上に、徳一・最澄の論争が位置づけられるのではないか、という知見を得ることができた（なお、これに関する研究成果である論文「徳一の三時教判に基づく法華経解釈」が日本印度学仏教学会賞を受賞した)。

また、「空有の論争」に関連して、先述の通り日本で大きな話題となった玄奘の「唯識比量」についても研究を行った。「唯識比量」については、中村元氏が新羅の元暁らの批判を高く評価したために韓国での研究が進んでいる。本研究の成果の一部を韓国の学会で発表することができた。一方で近年、「唯識比量」に対して肯定的な評価を行う研究がドイツから発表されたため、それを翻訳し日本の学会に紹介することができた。以上のように「唯識比量」については国際的な学術交流に資することができた。

なお、これらの日本古代・中世の研究については、本研究において構築されたテキストデータベースを活用することによって得られたものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
(1) 三谷真澄・橘堂晃一・芳澤勝弘・師茂樹「花園大学・龍谷大学ジョイントセッション　仏教資料のデジタル化と公開・活用をめぐって」（『じんもんこん 2011 論文集』、2011 年、pp. 335-338、査読無）
(2) 師茂樹「中国古典戯曲研究のための音韻表示システム　MediaWiki での実装の試み」（『漢字文献情報処理研究』12、2011 年、pp. 13-16、査読有）
(3) 師茂樹「徳一の三時教判に基づく法華経解釈」（『印度学仏教学研究』59-1 (122)、2010 年、pp. 58-65、査読有）
(4) 師茂樹「異なる文献間の数理的な比較研究をふり返る」（『文字と非文字のアーカイブズ／モデルを使った文献研究』、2011 年、pp. 31-38、査読無）
(5) 師茂樹「元暁の唯識比量解釈　―E. Franco 氏の説と比較しつつ―」（『元曉學研究』15、2010 年、pp. 101-116、査読有）
(6) 師茂樹「GraphText　紙テープに呪縛されないテキストデータの試み」（『漢字文献情報処理研究』10、2009 年、pp. 17-22、査読有）
(7) 師茂樹「東アジア因明文献データベースの構想とプロトタイプ作成」（『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』〔情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol. 2008, No. 15〕、2008 年、pp. 17-22、査読有）

〔学会発表〕（計９件）
(1) 師茂樹「日本宗教研究のためのデジタルアーカイブズの現状」（関西大学アジア文化研究センター（CSAC）第 1 回研究集会、2012 年 3 月 27 日、関西大学）
(2) 師茂樹「嵯峨本の数理的分析に向けて」（第 5 回角倉プロジェクト、2012 年 1 月 21 日、国際日本文化研究センター）
(3) 三谷真澄・橘堂晃一・芳澤勝弘・師茂樹「仏教資料のデジタル化と公開・活用をめぐって」（人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2011」、2011 年 12 月 11 日、龍谷大学）
(4) 師茂樹「新羅・真表伝の再検討」（第 62 回佛教史学会学術大会、2011 年 11 月 12 日、花園大学）
(5) 師茂樹「異なる文献間の数理的な比較研究をふり返る」（公開シンポジウム「文字と非文字のアーカイブズ／モデルを使った文献研究」、2011 年 2 月 18 日、京都大学人文科学研究所本館 101 セミナー室）
(6) 師茂樹「元暁の因明について ―唯識比量の解釈を中心として―」（2010 年度 第 15 回 元曉學研究院 學術大會「元曉學의諸問題 II」、2010 年 11 月 12 日、韓国・仏国寺文化会館）
(7) 師茂樹「徳一の三時教判に基づく法華経解釈」（日本印度学仏教学会・第 61 回学術大会、2010 年 9 月 10 日、立正大学）
(8) 師茂樹「東アジア因明文献データベースの構想とプロトタイプ作成」（じんもんこん:-) 2008 人文科学とコンピュータシンポジウム、2008 年 12 月 21 日、筑波大学・つくばキャンパス）
(9) 師茂樹「紙テープに呪縛されないテキストデータベース構築の試み」（漢字文献情報処理研究会第 11 回大会、2008 年 12 月 14 日、慶応義塾大学・日吉キャンパス）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
(1) http://kura.hanazono.ac.jp/wiki/
(2) Eli Franco（訳・解題: 師茂樹）「玄奘による観念論（*vijñaptimātratā*）の証明」（『花園大学文学部研究紀要』第 43 号、2011 年、pp. 87-112、原文: Eli Franco. “Xuanzang’s proof of idealism (*vijñaptimātratā*).” *Hōrin: Vergleichende Studien zur japanischen Kultur*, Vol. 11, 2005）

６．研究組織
(1)研究代表者
師　茂樹（MORO SHIGEKI）
花園大学・文学部・准教授

研究者番号：70351294
(2)研究分担者　なし
(3)連携研究者　なし